

# 外国人妻の夫婦間コミュニケーションの問題 — 先行研究の整理から —

伊 藤 孝 恵

## 要 旨

本稿では、国際結婚夫婦のコミュニケーションに関する先行研究を、ジェンダーと国際結婚の2つの観点より整理し、特に日本人との国際結婚のうち7割ほどを占める外国人女性にとっての夫婦間コミュニケーションの問題を探究した。その結果、夫婦が対等で双方にとって幸福感が得られる夫婦間コミュニケーションには、外国人妻を取り囲む社会全体の意識や制度の見直しとともに、コミュニケーションを行っている当事者同士の意識と行動の変革が求められるといえる。

キーワード：国際結婚、ジェンダー、文化差モデル、構築主義

## はじめに

これまでの研究により、夫婦関係や配偶者への満足度、幸福感に関与する要因については、夫婦の間で相違が見られるとともに、夫婦間のコミュニケーションの重要性が両者において指摘されている。生命保険文化センターの『夫婦の生活意識に関する調査』（1995年）によれば、配偶者に対する満足度への影響力が最も高いのは、男女とも「コミュニケーション」であり、以下、男性では「家事分担」「生活設計」「自分の就労への理解」、女性では「生活設計」「配偶者の就労観」「収入分配・支出管理」の順であった。このことから、配偶者に対する満足度を高めるためには、男女を問わず夫婦間のコミュニケーションが最も大切な要因であるといえる（同書:p.139）。

従来の理論的・実証的研究においても、良好な夫婦関係の維持にとって、良質なコミュニケーションを十分行うことの重要性が明らかにされており、国際結婚夫婦もその例外ではない。特に、互いの生まれ育った文化的背景の異なる国際結婚夫婦の間においては、ジェンダーに基づくコミュニケーションの違いばかりでなく、言語や価値観、習慣等の文化差も介在し、それらが時に双方の理解を妨げ、夫婦関係に亀裂を生むこともある。したがって、国際結婚夫婦においては、良好な夫婦関係の維持にとって、良質なコミュニケーションが一層求められるといえよう。

そこで本稿では、国際結婚夫婦のコミュニケーションについて、ジェンダーと国際結婚の2つの観点より整理し、特に日本人との国際結婚のうち7割ほどを占める外国人女性にとっての夫婦間コミュニケーションの問題点を探究する。

## 1. 夫婦間コミュニケーションに関する先行研究

### 1.1 夫婦間コミュニケーションと満足度

コミュニケーションの役割には大きく分けて二つあるといわれている。一つは情報伝達、もう一つは人間関係の維持、促進であり、これを社会的コミュニケーションという（佐藤 1998）。長谷川（2004）もまた、Weekland,Jの言葉を引用しながら、コミュニケーションにおいては情報伝達のもつ他者への影響の側面こそが重要であると述べており、良好な夫婦関係の維持にコミュニケーションは重要な役割を担っているといえる。A.Michel（1978）は、結婚に対する満足度と夫婦の目的の達成について最も決定的な諸要因の一つは、相互のコミュニケーションーその発達には夫婦の平等が必要である一であると述べている。

従来の日本の夫婦の間には、「以心伝心」「一心同体」という言葉で表わされるように、明確な意思表示をせずとも互いに分かり合い信頼し合えるという認識がしばしば存在していたように思われる。しかしながら近年、定年退職後の夫婦の結婚満足度を調査した袖井・都築（1985）や、デトロイトとの比較より東京の特徴を示したBlood（1967）、及び共稼ぎ夫婦における結婚満足度の諸要因を探った小澤（1987）などにおいて、夫婦相互のコミュニケーションが、結婚満足度に重要な影響を及ぼしていることが示唆されている。神原（1992）は、夫の場合にも妻の場合にも、パートナーとの間に強い一体化意識をもてること、またカップルとしての相互行為のチャンスが十分であること、といった夫婦間のつながりやコミュニケーションが、夫婦関係満足度を高める上でとりわけ強い影響を及ぼしていると述べている。

ただし、長津（1987）によれば、夫婦間コミュニケーションは、男女双方の結婚幸福感に対する規定力は強いが、その寄与の仕方が異なるという。女性では、その頻度の高いことがプラス、低いことがマイナス要因として働くのに対し、男性では、頻度の低いことがマイナス要因となることは女性と同じであるものの、プラス要因となるのはその頻度が中程度の時だといえるのである。つまり、夫にとって夫婦間のコミュニケーションが活発であることは、必ずしも結婚に対する肯定的評価に結びつかず、夫婦間のコミュニケーションは妻の一方通行の様相を帯びたコミュニケーションであることが窺い知れる。その結果、夫の無口で回避的なコミュニケーションスタイルは、妻の結婚満足度や幸福感を低下させ、産業構造や社会意識の変化も相俟って、夫婦関係の軋轢や破たんへと帰趨を決しかねない場合も起こっている。

難波（1999）によれば、妻の夫に対する不満には、「夫から優しい声かけがない」というレベルを超えて、「夫と共に育ち合いたい」「話し合いたい」という共感性を求めるものであったという。その一方で、怒る・黙る・席を立つ等によって会話を断つ、あるいは妻を斥ける・避けるという夫の行動に対し、それ以上夫に働きかけない・引き下がるという、相互交換による親密なコミュニケーションのある新しい夫婦関係を目指そうとしない態度も妻の間に一様に存在したという。ここには、従来の「日本的な」夫婦関係に変化を求めつつも、黙して語らずを良しとする男性と、男性と対等な土俵に上がることをあきらめてしまった女性という男女のコミュニケーション意識が、夫婦のコミュニケーションスタイルの違いとして反映されているといえよう。

## 1.2 「文化差モデル」に基づく男女のコミュニケーションの違い

「文化差モデル」とは、ジェンダーによる言語行動の違いを文化差と捉える考え方を指す(中村 2001)。このモデルの代表的な提唱者であるTannen (1990)は、男と女の話し方の違いを明らかにし、男女間のコミュニケーションで起きる誤解を解消するためには、「互いのメッセージを解釈する方法を学び、相手が理解し受け入れられる形で自分がメッセージを解釈する方法を説明する」ことにあると述べている。したがって、文化に優劣がないように、男女の言語行動の差に優劣は存在しない。

Gray (1992) も、男女間で最もトラブルの元になりやすい価値観の違いや言葉の食い違い、気持ちのすれ違いを男女の文化差と捉え、その違いを乗り越える具体的な方法を提示している。例えば、ストレスに直面した場合、男性はストレスの種となっている問題を解決することにより気持ちを取り戻すのに対し、女性はその問題に関して話すことによって気持ちを切り替えようとするという(同書:p.69)。佐藤(1991)は、メッセージには情報と情緒の二つの側面があり、両者は相補的な関係にあるが、夫が感情を抑制し情報中心の伝達を行うのに対し、妻は情緒の分かち合いを望む傾向にあるという。同様に、夫と妻でコミュニケーション行動・態度に違いが見られることは他でも指摘されており(Turner, Dindia and Pearson 1995、Lafrance, Brownell and Hahn 1997)、これらの見解から、否定的なコミュニケーション・パターンが与える心理的影響は、妻側でより深刻であると予測され(平山・柏木 2004)、夫婦の間で十分なコミュニケーションの時間と、互いに理解し合えているという共感をもてることが、特に妻における夫婦関係の満足度につながるといえよう。また、男性より女性の方が、相手に対し直接的な言動で応答している一方で、攻撃的な言動や会話の不適切な中断は相互的な共同作用において認めない傾向にあることも(Bresnahan&Cai 1996)明らかにされている。

## 1.3 男女のコミュニケーションの違いと文化・社会的背景

夫婦のコミュニケーション行動を二者関係だけでなく、結婚・夫婦を取り巻く文化・社会的文脈の中で理解しようとする動きもある(平山・秋山 2004)。夫婦間のコミュニケーションを単なる「男女の違い」にとどめず、そこに文化・社会的性差—男性優位の文化・社会的規範や男女の勢力・権力関係など多様な影響が加味していると捉える立場である。

平山・柏木(2001)では、コミュニケーション態度のうち、夫に最も顕著な態度は「威圧」、妻に顕著な態度は「依存・接近」であり、妻の経済的地位が高いほど、夫は妻に対して共感的なコミュニケーション態度をとる傾向が明らかにされている。そして夫と妻とが対照的に異なるコミュニケーション態度をとる背景には、性的社会化の影響、男女間の社会的・経済的地位の格差があると推察している。

Acitelliら(1993)では、結婚幸福度に対する最も強い予測変数は、妻にとっては自分が夫を理解していることであつたのに対し、夫は自分の言動を自身で語ることであつた。つまり、妻の夫への理解は妻の結婚幸福度に寄与するものの、夫の妻への理解は夫の結婚幸福度には寄与しないということである。これは、女性は自己のアイデンティティを他者との関係性に求めると示唆するGilligan(1982)に通じ、伝統的に人間関係に配慮する者として、妻は夫婦関係を円

滑に機能させるために夫に対する理解が求められているともいえる。加えてこの男女差の社会的・経済的背景には、権力が上の者（この場合は夫）は下の者（この場合は妻）を理解する必要性が大きいことが考えられる。そして、妻は夫を理解することによって夫の支配（control）を感じつつも夫の財力を手に入れることで、自分の結婚幸福感が得られるともいえよう。

このように、単に「男女ではコミュニケーション態度が異なる」として、男女それぞれの言語文化の特徴を理解し合うことで「誤解」を解消しようという立場から、なぜ女性がコミュニケーションにおいて相手との「関係性」や「共感」を求めるのか、男性が「自立性」や「上位性」を示そうとするのかまで考慮するのならば、文化・社会的文脈の中で男女のコミュニケーションの特徴を解釈する必要があるといえるだろう。

## 2. 国際結婚夫婦のコミュニケーションの問題

### 2.1 日本における外国人妻の抱える問題

今日日本において増加、多様化している国際結婚の約7割が、「夫日本人、妻外国人」で、その外国人妻の多くは、フィリピン、韓国・朝鮮、中国といったアジア諸国出身者である。その増加、多様化の背景には、国際的な人口の流動化とともに、送り出し側、受け入れ側の社会的・経済的事情がある（篠崎 1996、葛 1999 2000）。敷衍していえば、日本における国際結婚増加の主な背景としては、変る日本人女性の結婚観と変らぬ社会のジェンダー意識との狭間で生じた晩婚化と結婚率の低下が、結婚人口の性別不均衡をもたらし、それが深刻な農村部では、これを解消するため海外に女性を求め、昇婚を望むアジア人女性との間で思惑が一致したためと考えられる。

つまり、今日の日本における国際結婚増加の背景には、人々の出会いと接近の機会の広がり多様性が内包されていると同時に、結婚に対する変わらぬ日本男性の意識と日本とアジア諸国との経済格差が存在するといえる。外国人妻は、国家間の経済格差上にある差別意識や、日本社会・文化への同化圧力の中で、言葉や価値観、習慣等の違いに戸惑うばかりでなく、家庭内や親子間でのコミュニケーション・ギャップやエスニック・アイデンティティの揺らぎ、日本において依然根強い性別役割分業にも直面している。このような外国人妻の抱える問題は、外国人妻個人や国際結婚家族のみならず、日本社会全体の問題でもあり取り組むべき課題でもある。

### 2.2 外国人妻の言葉・コミュニケーションの問題

外国人妻の問題や悩みとして筆頭に挙げられるのが言葉の問題である。公的機関や病院などでの説明の他、家庭内や職場、地域での生活、コミュニケーション言語のほとんどが日本語である。ただし、欧米系出身者の場合、病院などで英語が話せる人が少ないなどの不満が聞かれるものの（秋武 1995）、英語の説明書や案内がある、夫婦間の言語はほぼ英語である、英語で仕事ができる、映画館やビデオなどでハリウッド映画が見られるなど、生活や周囲の人とのコミュニケーションが英語で済ませられることが比較的多い。けれど非欧米系出身者の場合、

職場や地域、家庭において彼女たちの母語が尊重され使用される場面や機会は稀であり、日本語の使用を余儀なくされることがほとんどである。そのため、絶えず母語でない日本語を使用していかなければならない精神的負担や言語的不利益、母語が認められない寂しさや苛立ちといったものを抱えながら生きていくのは、アジアなどからの非欧米系出身女性である。それに加えて、地理的に遠い、時間がない、家族の理解がないなどの理由で、日本語教室に通ったり日本語を学んだりすることが難しいケースも指摘されている(石河 2003、鄭 1992)。

また、子どもとの言葉に関わる問題もある。新田(1996)によれば、外国人妻が欧米系の場合、「一親一言語」、すなわち母親は子どもに母語で話しかけているという。そこにあるのは、母親たちが自分の母語で接する方が簡単で気楽だからという言語的な容易さだけではない。自分が生まれ育ち培ってきた文化的要素や、心のひだに浸透するような情緒的な要素は、やはり母語でなければ伝わらないという心理的・情緒的意味合いがある。さらに子どもをバイリンガルに育てたいという社会的・教育的意識もある。こうした思いは、当然非欧米系の母親にもある。しかしながら、国際結婚夫婦の子どもが、父親・母親両方の言葉や文化をバランスよく身に付けた加算的バイリンガルやバイカルチュラルな存在になるためには、1) 母親が外国人で、2) 外国人の親の言語が一般的に使用できる威信のあるもので、3) 家族がその外国の文化を保つ姿勢があることが条件であると言われている(嘉本 1992)。この点において、非欧米系の女性にとっては、彼女たちの母語が日本社会や日本人家庭で尊重され積極的に使用される環境ではなく、反対に日本語・日本文化の強制や同化、周囲のアジア蔑視などが相俟ることから、両親のもつ二つの言語・文化を継承させる視点で子どもを育てることが難しい現状にある。むしろ、「日本人として」育てよう日本人家族に強いられるケースや、日本に適応させるため、自らの母語や母文化を我が子に伝えていくことをあきらめてしまうケースもある(石河 同)。このように、外国人妻が非欧米系の場合、言葉の問題は自分自身の日本社会での適応に重く押し掛かるだけでなく、子育てや母親としての自尊心にも大きな影響を及ぼしている。

### 2.3 国際結婚夫婦のコミュニケーション

日本においては依然国際結婚夫婦に関する研究は少なく、特に夫婦間コミュニケーションに焦点をあてたものは極めて稀少である。ただし、国際結婚においても夫婦間のコミュニケーションが重要であることは指摘されている(齊藤・根本 1998)。

施(2000)は、夫婦間コミュニケーションに比較的重点を置き、夫婦関係満足度に寄与する要因について量的調査を行っている。その結果、夫の婚姻満足度より妻の婚姻満足度の方がコミュニケーション側面によって説明される程度が大きく、夫の婚姻満足度は夫自身のコミュニケーション特性によって規定されるが、妻の場合は、妻自身のコミュニケーション特性以外に夫の言語コミュニケーションへの意欲によっても規定されていた。つまり、国際結婚夫婦においても、自分のコミュニケーション態度にのみ満足度の重点を置く夫に対して、妻は自分のコミュニケーション態度に加え、夫との関係性も含んでの満足度となっていることが明らかにされており、夫婦関係に配慮する妻の様子が窺える。

その分、言語的に十分な疎通が図られていない場合、夫婦間で問題の顕在化が遅れ、その間

題を一人抱え込むことになるのは外国人妻である。実際、ある精神外来を受診した国際結婚症例の患者のうち、性別では圧倒的に女性、それも国籍問題や経済面で弱い立場に置かれやすいアジア諸国からの外国人妻が多く、訴えてくる問題の背景には、夫婦間のコミュニケーション不全があることが指摘されている(大西ら 1995)。

また、夫婦間や親子間での使用言語の違いは、関与する言語の社会的、また国際的威信性や有益性に大きく影響を受けて生じている可能性があり(山本 2004)、夫婦間や家庭内での力関係は、自分の国で母語でコミュニケーションをとる配偶者の方が有利になりがちである(石河同)。つまり外国人妻、特に非欧米系の女性にとっては、日本人男性との夫婦間コミュニケーションにおいて、母語でない日本語の使用と、文化的・社会的性差—男性優位の文化的・社会的規範や男女の勢力・権力関係など—という二重のバイアスを家庭の内外から受けていることになる。

### 3. 今後の展望

外国人妻と日本人夫との間で真に対等で満足感をもたらすコミュニケーションが成り立つには、跛行的な男女のコミュニケーション態度を見直し、外国人妻、特に非欧米系の女性が日本語で日本人らしい話し方や振る舞いをするを当然視する日本人側の意識を俎上に載せる必要がある。

例えば、前述の施で指摘された「夫は自己完結型、妻は他者関係型」や、「男性は自分が相手に受け入れられ、認められて頼られていると実感することで、女性は自分が愛され大切にされているという実感がもてることで、それぞれ幸福感が得られる」(Gray 同:p.23)とするコミュニケーション態度の特徴を、単なる男女の違いだとする「文化差モデル」で完結させてしまうなら、女性がなぜ他者との関係の中に満足感やアイデンティティを見出すのか、その文化・社会的文脈に存在する女性の地位の低さや弱さを見落としてしまうことになるだろう。

また、日本人同様の日本語使用と、日本の価値観や習慣を習得するよう強いられることも、「郷に入れば郷に従え」として「仕方がない」と黙認されたままであるならば、日本人と外国人が共に対等に暮らせる社会には程遠いだろう。

近年、男女のコミュニケーションの特徴を固定的で本質的に存在するものとして二項対立で捉える「構造主義」に疑問を呈し、ポスト構造主義、所謂「構築主義」によってジェンダーの言語分析に生かす枠組みが新たに提唱されている。

「構築主義」とは、社会の中の知識や個人のアイデンティティは厳然として存在しているのではなく、歴史・社会的に作り上げられており、この過程において言語が大きな働きをしているというもので、ここでいうところの「言語」とは「ことばを使う行為(ディスコース)」である(中村 同:p.90)。

すなわち、男性・女性、日本人・外国人の権力構造は、文化・社会的文脈から個々の夫婦関係へと影響を及ぼすばかりでなく、個々の夫婦間のコミュニケーション(ディスコース)もまた権力構造を作り上げ、正当化する働きをしているという見方である。女性は最初から柔らかく丁寧な言葉遣いや間接的な言い回しをするのではなく、社会生活を営む中で社会で期待され

ている話し方を選択して身につけていき、自ら男性優位の権力構造の中に「女性らしさ」を作り上げていることになる。またアジア系外国人、特に外国人妻の多くは、日本社会や日本人からの直接的あるいは間接的求めに応じ、母語や母文化のかわりに日本語や日本の価値観・習慣の習得・使用を自らに課すことで、日本人優位の権力構造の中に「日本人らしさ」を正当化する働きを担っていることになる。

つまり国際結婚夫婦において夫婦がより対等で幸福感が得られる夫婦間コミュニケーションを目指すには、外国人妻の桎梏となっている夫婦の意識と行動の変革が求められる。それと同時に、個々の夫婦の問題にとどまらず、外国人妻を取り囲む社会全体の意識や制度の改革・見直しもまた必要となろう。

## 引用文献

- 秋武邦佳 1995 「在日を生きる外国人妻たち」『教育評論』vol.581
- 石河久美子 2003 『異文化間ソーシャルワーク』川島書店
- 大西守・山寺亘・中山和彦 1995 「国際結婚例における心身医学的問題」『心理医学』第35巻第3号 229-233
- 小澤千穂子 1987 「共稼ぎ夫婦における結婚満足度」『家族関係学』6巻 1-6
- 葛慧芬 1999 「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの必要性ー中国人花嫁の事例からー」『日中社会学研究』第7号 日中社会学会
- 葛慧芬 2000 「国際結婚における「共生」の課題」「金沢学院短期大学紀要「学業」」vol.42
- 神原文子 1992 「夫および妻の夫婦関係満足度を規定するもの」『愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)』第41号 p.64
- 嘉本伊都子 1992 「国際結婚の動向と研究課題ーF・ニッタ論文とA・B・コットレル論文の比較検討を通してー」『社会学専攻紀要』16巻 明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻編
- 近藤裕 1998 『家庭内再婚ー夫婦の絆とは何かー』丸善ライブラリー
- 佐藤響子 1998 「伝えることと伝わることのはざま：誤解を生む原因と会話を継続させる力」『横浜市立大学紀要人文科学系列』5号 p.48
- 篠崎正美 1996 「国際結婚が家族社会学研究に与えるインパクト」『家族社会学研究』No.8
- 鄭暎恵 1992 「異文化適応と家族ー民族と国家のはざまでー」『変貌する家族6 家族に侵入する社会』上野千鶴子他編 岩波書店
- 施利平 2000 「国際結婚夫婦におけるコミュにケーションと婚姻満足度」『ソシオロジ』第44巻3号
- 長津美代子 1987 「2・30代夫婦の結婚幸福感」『青葉学園短期大学紀要』第12号 75-84
- 中村桃子 2001 『ことばとジェンダー』勁草書房 p.74
- 難波淳子 1999 「中年期の日本人夫婦のコミュニケーションの特徴についての一考察ー事例の分析を通してー」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第8号 69-85
- 新田文輝 1996 「国際児の社会化ー言語的社会化と兄弟姉妹差を中心にー」『家族社会学研究』No.8 97-109

- 平山順子・秋山泰子 2004 「夫婦の職業生活とコミュニケーション」『家族心理学年報22 家族内コミュニケーション－ところを運ぶことばの力』日本家族社会学会編 p.55
- 平山順子・柏木恵子 2001 「中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？」『発達心理学研究』第12巻 第3号 216-237
- 平山順子・柏木恵子 2004 「中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連」『発達心理学研究』第15巻 第1号 89-100
- 山本雅代 2004 「研究課題番号15652026 国際結婚家庭における母語の使用と子への継承:日本語-非英語家庭の言語使用状況調査」 2003-2004 萌芽研究 研究種目コード
- Mary I. Bresnahan, Deborah H. Cai 1996 *Gender and Aggression in the Recognition of Interruption DISCOURSE PROCESSES* 21 171-189
- Carol Gilligan 1982 *In a Different Voice. Psychological Theory and Woman's Development.* Cambridge: Harvard University Press. 岩男寿美子監訳 生田久美子・並木美智子共訳 1986 『もうひとつの声－男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店
- J,Gray 1992 *Men are from Mars. Women are from Venus.* 大島渚訳 2001 『ベスト・パートナーになるために』三笠書房
- Mariane Lafrance, Hiram Brownell, Eugene Hahn 1997 *Interpersonal Verbs, Gender, and Implicit Causality.* *Social Psychology Quarterly.* Vol.60, No.2, 138-15
- Tannen, D 1990 *You Just Don't Understand: Women and Men in communication.* 田丸美寿々訳 2003 『わかりあえる理由わかりあえない理由：男と女が傷つけあわないための口のきき方 8章』講談社
- Lynn H. Turner, Kathryn Dindia, Judy C. Pearson 1995 *An Investigation of Female/Male Verbal Behaviors in Same-Sex and Mixed-Sex Conversations.* *Communication reports.* Vol. 8, No. 2, Summer